

11 富士川游と看護療法

平尾 真智子

富士川游は明治・大正・昭和を通じて日本における医学の発展に貢献した医学者である。彼の著作は数千にも及び、その医史学に関する代表的な著作は、ご子息の富士川英郎氏編集による「富士川游著作集」全十巻（思文閣出版、昭和五十五―七十七年発行）にまとめられている。彼の医学に対する関心は、東洋医学史、医学分科史、医術と医業、医者への風俗・迷信、疾病史、病志・療法の歴史、民間薬、医科倫理学・典籍、伝記、医史料などほぼ医学の全分野にわたっている。医学の全分野を研究対象とするならば、看護もその視野に含まれているはずであると考え、看護に関する考え方の表現されている文献を探索したところ、三編を見いだすことができた。本研究ではそれらの文献の内容を考察することで、彼の看護観を明

らかにすることを目的とする。

今回対象とした文献は「知学的看護法」（中外医事新報、明治三十三年）、「人工治癒法その一、二の新式に就いて」（順天堂医事研究会雑誌、明治三十四年）、「看護療法」（日本内科全書第二巻に収録、大正二年）の三つの文献である。

中外医事新報に三回にわたって連載された「知学的看護法」（四九五号、四九六号、四九八号、明治三十三年）では、ドイツの医師メンデルソン氏の提唱する知学的看護法（ヒプルギー）について紹介している。その内容は、知学的看護法の定義、歴史、知学的療法における知学的看護法の位置、知学的看護法の治療作用、知学的看護法の治療材料、知学的看護法の作用、結論の七項目から構成されている。順天堂医事研究会雑誌三四二号に掲載された「人工治癒法その一、二の新式に就いて」（明治三十四年）では天然治癒と人工治癒について述べ、天然治癒には限界があるから人工治癒法を用いて疾病の快復数を増し良好な経過を図ることが医学の責任であると述べている。そして人工治癒法の種別をサムエルの四つの分類に基づき、さらに二十二の療法に分けて紹介している。新式の

人工治癒法として運動療法、練習療法、精神療法、栄養療法、看護療法をあげている。看護療法については中外医事新報に紹介したメンデルソン氏がヒプルギーと名付けた新療法を取り上げて簡単に説明している。ここではこの療法のことを「医術的看護法」、「科学的看護法」とも言っている。日本内科全書第二巻(吐鳳堂、大正二年)は治療総論で、栄養療法、水治療法、温熱療法とともに「看護療法」が収録されている。そのなかで看護療法は治療の一法であり、科学を基礎とし、その主旨とするところは病者の特性・習慣・生活方法、精神状態に注意して、病気の治癒を促進する方法を講ずることにある、と述べている。さらに看護療法の内容として、病室、病床、病者の体位、病者の四囲、食物、身体の看護、両便の排泄、咯痰の排泄、疼痛に対する処置、熱に対する処置が記載されている。

医史学の大家富士川游の看護に関する論述の内容を分析した。彼はドイツ留学から帰国後ただちに中外医事新報に知学的看護法を連載し、わが国に紹介した。この療法はドイツでもまだ研究されてから数年しかたっていない

いという新式の治療法の一つであった。彼は自己の研究対象である医学史の分野に看護を明確に位置づけていた。彼の看護観はドイツ医学の動向を踏襲したものであったが、明治三十三年という早い時期に医学全体における看護の位置づけ、看護の本質について適確にわが国に紹介した功績には大きなものがある。大正二年以降、この看護療法(ヒプルギー)がわが国の医学全体のなかにもどのように取り扱われていくのかについてはよくわかっていない。また彼の著作集の年表に、明治四十一年に看護学会を開催したという記事もみられるが、詳細については不明のため今後の課題にしたい。

(山梨県立看護短期大学)